

はたち すで 二十にして心已に朽ちたり

経済学部長 前田高志

中国の唐の時代に李賀（791～817）という詩人がいました。十七歳のときに詩人としてすでに大家であった韓愈（768～824）に才を見いだされて詩作の世界に入り、幽玄な詩を数多く残しています。李賀や韓愈の時代から二百年を経た宋の時代の随筆集「南部新書」に「李白を天才絶（最高の天才）と為（な）す。白居易を人才絶と為す。李賀を鬼才絶と為す。」と三人の詩人を並べ称讃する記事があります。「鬼才」という言葉はここで初めて使われており、李賀のためにつくられたと言われています。天才、人才に対して鬼才とは神秘的なものを表現することの卓越した才能とされます。李賀は幻想的なものを歌うことにおいて、比類のない存在でした。その李賀のつくった詩のひとつに「贈陳商」（陳商に贈る）があります。その冒頭の部分（読み下し）を紹介させていただきます。

長安に男児あり
二十にして 心已に朽ちたり
楞伽 案前に堆く
楚辞 肘後にかかる
人生 窮拙あり
日暮 聊か酒を飲む
祇今 道已に塞がる
何ぞ必ずしも 白首を須たん

（荒井健注『李賀』（中国唐詩選集 14、岩波書店）

現代文に読みかえると次のようになります。

長安に男児がおりまして、二十で心はもはや朽ち果ててしまいました。
楞伽経（仏教の経典）は机上に積まれ、楚辞（紀元前 300 年の楚の国の韻文）がうしろに置かれます。
人生にはどうしようもならぬ行きづまりがある。
日が暮れるとまずは酒を飲むことぐらい。
現在ただいまお先は真っ暗なんで、しらが頭になるのを待つ必要はないですよ。

この詩は李賀が友人で、やはり韓愈の弟子の陳商のためにつくったものですが、実は彼が自分自身の境遇を歌ったと言われている

す。李賀は二十歳のとき、官僚としても大官であった師の韓愈によって官僚登用試験、科挙の本試験受験資格「進士」に推挙されますが、試験にまつわるある不合理な仕来りによって受験を断念させられます。ご存知のように唐の時代に科挙を経て高級官吏になるということは、わが国の国家公務員総合職、いわゆるキャリアになる試験よりもはるかに難しく厳しいものですが、官僚になるに相応しい非常に優れた才能を持ちながら、その途を閉ざされた李賀の失意の思いがこの詩にこめられています。



しかし、同時に、この詩にはそうした無念や空虚だけではなく、李賀の二十歳にしての早熟な精神と才が投影されています。わずかに「二十にして」朽ち果てるまでに達した精神の成熟です。虚脱と背中合わせながら、もうこれ以上、齢を重ねるまでもないという思い切りをさせる早熟が見取れるのです。

いま経済学部の学生の皆さんは二十歳の前後の年齢です。私は皆さんも李賀と同じく、そうした早熟な才と魂を持つ可能性を有する存在であるものと考えます。無論、皆さんの心はまだ朽ちてはいないでしょうし、朽ちてはいけません。しかし、私たちは、朽ちうる高みに昇華できる存在として、皆さんを認識していかなばならないと思うものであります。

この『エコノフォーラム 21』はそうした学生の皆さんが教職員と協働してつくられたものであり、皆さんの「成熟」と大きな可能性が顕れたものとして、経済学部の大切な財産と言えます。エコゼミ委員会の皆さんをはじめとして発行にご尽力頂いたすべての方々へ感謝を申し上げますとともに、本誌が今後ともにさらに充実したものとなっていくことを願っております。